

22. 興道寺廃寺

こうどうじはいじ

所在地：三方郡美浜町興道寺

調査原因：内容確認

調査期間：—（平成14年～27年）

調査主体：美浜町教育委員会

調査面積：2,201 m²（全体の調査面積）

時代：古墳後期～古代



位置図（S=1/50,000）

調査の概要 美浜町教育委員会では、平成14年度から26年度にかけて興道寺廃寺の発掘調査を進めてきました。一連の調査によって、7世紀後葉に建立され、8世紀後半以後に堂塔が造り変えられたことが判明し、また塑像螺髪などが出土し、宗教活動の一端が判明するなど、地方古代寺院のあり方がよくわかる一例として注目されます。

遺構 一連の調査であきらかとなった主な成果は以下のとおりです。

①**創建期の伽藍域** 創建段階の金堂、塔、講堂の基壇、伽藍北限に伴う東西溝を確認しました。伽藍域は中門基壇の推定位置と講堂基壇との中心間の距離で南北約51m、東西で50m強の範囲が想定されます。

金堂基壇の規模は東西約16.8m、南北約13.8m、令小尺（1尺=0.300m前後）で東西56尺、南北46尺（以下、同じ）。基壇積み土は地山面の上にかなり精緻な版築を施しています。塔基壇の規模は一辺12.0m、40尺。講堂基壇は東西約18.0m、南北約12.0m、東西60尺、南北40尺に復元できます。金堂、講堂ともに礎石、据え付け掘り方ともに失われ、建物の構造は不明ですが、塔初層の柱間については中央間3.0m、脇間1.8mと想定されます。講堂基壇から寺域北限付近までの範囲には、掘立柱建物跡3棟、柱穴列1基、区画痕跡1基などが確認され、順次、寺院北方施設の整備が進められたようです。

②**再建期の伽藍域・寺域** 金堂、塔、中門、講堂の基壇、寺域南限に伴う南門基壇、寺域北限に伴う東西溝と寺域西限に伴う南北溝を確認しました。塔基壇の南北軸の方位は座標北から10度西偏し、南門基壇の南北軸の方位は4度西偏し、金堂・中門基壇の南北軸の方位は座標北から2度東偏するなど、複数の基壇造営時期があったことがうかがえます。この段階の伽藍域は、中門基壇と講堂基壇との中心間の距離で約51mと、創建期の南北規模と大差はありません。

金堂基壇は創建期の基壇をそのまま利用しながら北側と東側を若干拡張し、南側と西側を削平して造営しています。塔基壇は創建期の基壇の下部を埋め殺し、全体的に拡張して造り、講堂基壇は基本的には創建期の基壇をそのまま基壇としています。南門基壇は創建期の2条の東西溝を埋めて造成し、その上に基壇を造っています。金堂・中門・南門では外装に石積みを伴います。

金堂基壇の規模は東西約 18.0m、南北約 14.1m、東西 60 尺、南北 47 尺。南北中央に柱間一つ分の幅の階段が付設されています。北面階段の幅 2.4m、8 尺、階段の出 1.6m 前後、5 尺ほどに復元されることから、基壇の高さは 1m 弱（現存高は約 0.2～0.3m）、金堂の建物の柱間は 2.4m、8 尺として、東西 5 間、南北 4 間、つまり東西 12.0m、南北 9.6m、東西 40 尺、南北 32 尺の平面規模が復元できます。塔基壇の規模は一辺約 15.3m、一辺 51 尺の規模に復元されます。基壇検出面で心礎抜き取り坑、四天柱の礎石据え付け掘り方 3 基、側柱の礎石据え付け掘り方 4 基を確認し、その位置関係から柱間の長さは中央間 3.3m、11 尺、脇間 3.0m、10 尺に復元できます。中門基壇の規模は東西約 7.4m、南北約 6.2m、東西 24～25 尺、20～21 尺、基壇の南北軸の方位は金堂と同じくします。

寺城南限に関しては南門基壇を検出したことでその位置が明らかとなり、北限については地山面を掘り込む東西溝付近に位置します。寺域の南北規模は、西端付近で南北 118m ほど、東端付近で南北 112m 前後の範囲と考えられます。西限は、ほとんどが現在の道路下に位置する南北溝付近に位置するものと考えられ、寺域の東西規模は東西 80m ほどの寺域の範囲が復元されます。

講堂基壇から寺城北限までの範囲では、掘立柱建物跡 1 棟などを検出しており、寺院北方施設の整備がさらに進んだものと考えられます。

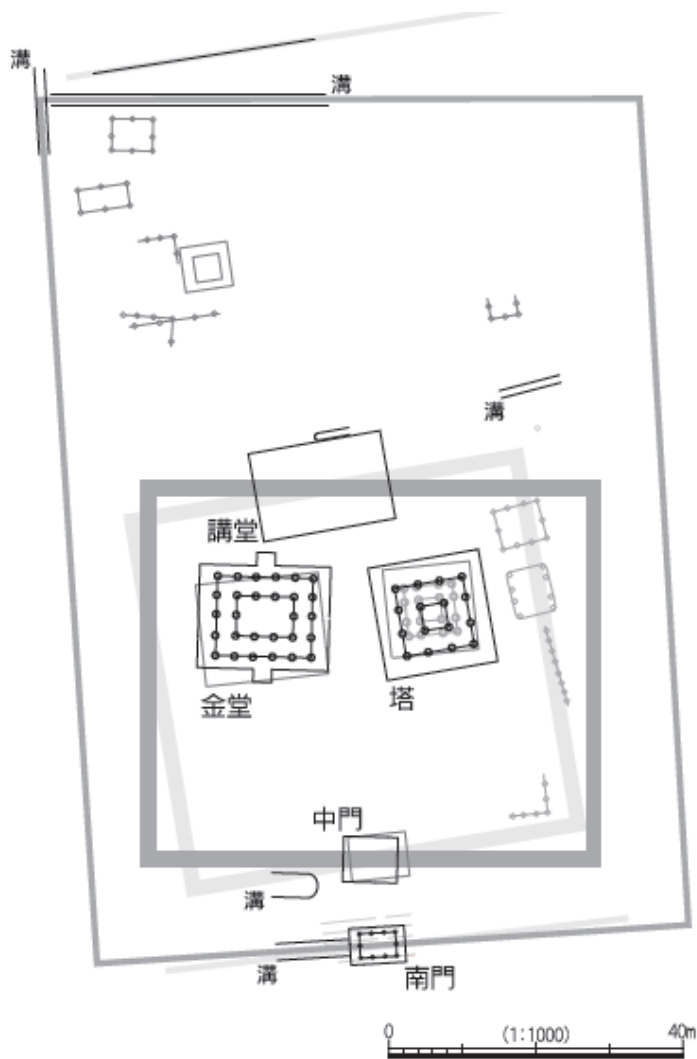
遺物 一連の調査で、堂塔などの建物に伴う多くの瓦が出土しましたが、塑像螺髪、銭貨などの出土も目を引きます。

①**建物部材** 軒瓦は、丸瓦・平瓦ともに三種が出土し、その文様構成から近江の湖東地域（滋賀県東部）、あるいは宮都周辺からもたらされたものと考えられます。建築部材として、金堂基壇の周辺から大きな鉄釘、土壁などが出土しています。付近の奈良時代の集落跡（興道寺遺跡）からは鞆羽口、鉄滓など、小鍛冶に伴う遺物が出土し、寺院造営に伴う工房施設が所在していました。

②**宗教関連遺物** 2 種の塑像螺髪 11 点が出土しました。金堂基壇の周辺からは砲弾形の大型の螺髪が出土し、丈六の塑像如来仏が本尊として再建段階の金堂に安置されていたものと考えられます。また、塔基壇からは円錐形の螺髪が出土し、小型の如来仏が塔本塑像として安置されていた可能性も考えられます。また、再建期の中門基壇の積み土からは和同開珎、万年通宝、神功開宝など奈良時代鑄造の銅製銭貨 14 点が出土しました。祭祀として散銭に用いられた可能性が考えられます。

③**その他** 再建期の塔基壇から「耳」と墨書された須恵器が出土しました。10 世紀前後の蓋の天井部分に大きく墨書されており、当地の地名が弥美であることと相まって、寺名、あるいは檀越名を示す資料として注目されます。

まとめ 6 世紀から 7 世紀前半にかけての在地首長層の集落形成、7 世紀第 4 四半期から 8 世紀前葉の金堂、塔、（中門）の建立からなる寺院の創建、8 世紀中葉の講堂の建立、8 世紀中葉の塔の建て替え、8 世紀後半の南門の建立、金堂・中門の建て替え、9 世紀末葉～10 世紀前葉の寺院廃絶といった変遷を確認できます。伽藍の大体の規模も判明し、日本海側で伽藍の様相が知られる寺院と比較しても金堂、塔、講堂が近接するいくつかと事例と共通する一方で、中門が南に離れて位置することは興道寺廃寺の特徴の一つとなっています。



第1図 興道寺廢寺伽藍復元図（縮尺 1/1,000）

瓦は8世紀中葉の時期までに収まるもので、寺院の存続に比して比較的早くに堂塔の屋根部材が総じて瓦から植物素材へと変わっている可能性が高いと考えられます。

とかく降雪が多い地域の古代寺院では建物の屋根が瓦葺きであることが少ないことが指摘されていますが、興道寺廢寺でも瓦の全面的な使用が初期伽藍に限定されることが特筆されます。

興道寺廢寺の発掘調査も一区切りし、平成28年3月には総括の発掘調査報告書が刊行されました。現在は、国史跡としての指定を目指した作業が進められています。

（松葉竜司）

寺域(寺院地)に関しては、直近の調査が寺域確認を目的とした調査であったこともあり、さらに新しい知見を加えることができました。

寺域東限に伴うと考えられる地山面の微起伏、西限に伴うと考えられる南北溝を新たに確認したことで特に再建期の寺域規模がおおむね判明しました。

日本海側の古代寺院においても寺域の規模、寺域を画する施設の構造も多様ですが、長期間に及ぶ造営があった寺院においては寺域の平面構成が総じて企画性に乏しく、方形でありながらも崩れて不定形なプランなものも見られ、これらとの共通性がうかがえそうです。



写真1 興道寺廃寺周辺空中写真（南から）



写真2 興道寺廃寺周辺古代景観復元イラスト



写真3 再建期金堂基壇北辺（北から）



写真4 再建期塔基壇西辺（南から）



写真5 再建期中門基壇（南から）



写真6 再建期南門基壇北東隅部石積み（北西から）



写真7 再建期寺域西限溝（北から）



写真8 塑像螺髪